

切除不能な進行・再発大腸癌の2次治療例を対象とする 血液検体を用いた効果予測因子および予後因子に 関する探索的研究

大腸がんに対する治療には、大きく分けて、「手術」と「抗がん剤による治療(化学療法など)」の2通りがあります。がんの進行度合いや広がり程度、患者さんの体の状態に応じて、もっとも適した治療方法を採用します。

大腸がんに対する化学療法で使用する薬剤には、フッ化ピリミジン系抗がん剤とオキサリプラチンあるいはイリノテカンを組み合わせる治療法(FOLFOX療法またはXELOX療法、あるいはFOLFIRI療法)が、初回治療(1次治療)およびその後続く治療(2次治療)として推奨されています。また最近では、これらの治療法に、がん細胞およびその周辺に特徴的に発現するたんぱく質などを標的とした分子標的薬(ベバシズマブ、セツキシマブ、パニツムマブ)を併用する治療法も推奨されています。

この臨床研究では、バイオマーカー用に採血された血液を用いて薬の効き方に影響を与える要因を見出すことや、それらを予測するバイオマーカーとなるタンパク質を見出すことで、大腸がんの治療向上に役立つことが期待されます。

近年、がん細胞が増殖、浸潤、転移するメカニズムが、様々な方法によって次第に明らかにされてきました。従来用いられてきた抗がん剤に加えて、特定のメカニズムに関わるタンパク質の働きを抑えることで治療効果が期待される分子標的薬が数多く創られ、いくつものがんにおいて治療成績の向上につながっています。

この臨床研究の目的は、患者さんの血液を用いて、タンパク質や代謝物の解析を行うことにより、抗がん剤の治療効果・副作用に関連するバイオマーカーを新たに見つけ出すこと、さらにこれらの情報を用いて個々の患者さんに最適な治療法を選択できる検査システムを構築することです。

本研究は、国が定めた「臨床研究に関する倫理指針」を遵守し、当院での臨床研究倫理委員会(臨床研究の実施または継続について、倫理的観点及び科学的観点から調査及び審議する委員会)においてその科学性・倫理性について厳重に審査され、病院長の承認を受けて実施されます。